

	本年度重点目標	具体的な取組	評価指標	判定基準	集計結果	評価	分析(成果)(課題と改善策)
学びが楽しい学校づくり	【学びが楽しい学校づくり】 体験活動や学び合いを充実させ、学習への意欲の向上と自己肯定感を高める。	カリキュラムマネジメントの視点から、教科間や学校行事とのつながりを十分に意識し、計画的に学習を進めていくとともに、児童が目的を持って体験活動に取り組めるようにする。 また、学び合いを充実させるために、授業において児童が自分の考えを話しやすい雰囲気づくりに努め、児童同士が考えをつないでいく授業を目指す。	(児童アンケート) 「学校で学ぶことは、楽しいですか。」 ア 楽しい イ だいたい楽しい ウ あまり楽しくない エ 楽しくない (保護者アンケート) 「子どもは学校へ意欲的に登校していますか。」 ア 意欲的に登校している。イ おおむね意欲的に登校している。 ウ あまり意欲的ではない。 エ 意欲的ではない。	児童アンケート・保護者アンケートともに A…ア+イが90%以上 B…ア+イが85%以上 C…ア+イが80%以上 D…それ以下	児童アンケートア+イ 93.7% 保護者アンケートア+イ 92.4%	A	<成果> 感染症拡大に伴う臨時休業のため中止になった学校行事もあったが、実施可能な範囲で計画を立てて実行したり、子どもたちが「分かる授業」を目指して学習を進めたりすることができた。学び合いを充実させるために、授業において児童が自分の考えを話しやすい雰囲気づくりに大切にし、発言の場を保障するようにした。 <課題> 例年通りの体験活動を全て実施することは難しいが、子どもたちが主体的に取り組めるように、工夫していく必要がある。特別活動においても、教師主導で進めるのではなく、子どもたちの考えやアイデアをいかして実行していく。授業では、基礎基本が「分かる」「できる」という達成感が味わえるようにするとともに、児童が主体的に課題解決に向かうことができる授業づくりについて教職員の研修を推進していく。
基礎・基本の定着と学力向上	【主体的に課題解決する児童の育成】(学校研究) 主体的に学び、課題解決へとつなげることができる児童を育成する。	算数科において、4～6年生は毎単元末で単元まるごとの授業を行う。物事を複合的に考えて課題解決する活用力と実生活に生きて働く力の育成を図る。 また、「3問チャレンジ」の授業スタイルを教師も子どもも確立し、3問目では自分の力で問題を解くことができるようにする。	(児童アンケート) 「単元で学んだことを、他の課題に生かすことができましたか。」 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった (教職員アンケート) 「単元の中で、児童は、課題を見つけていましたか。」 ア 見つけていた イ だいたい見つけていた ウ あまり見つけていなかった エ 見つけていなかった	児童アンケート・教職員アンケート A(児・教)ア+イが90%以上 B(児・教)ア+イが80%以上 C(児・教)ア+イが70%以上 D それ以下	児童アンケートア+イ 82.3% 教職員アンケートア+イ 80.0%	B	<成果> 児童アンケートによると、高学年は「ア+イ」で84%、低学年で81%になっている。このことから、概ね児童は単元で学んだことを他の課題に生かそうと心がけていることが分かる。特に高学年を中心に本校の取組の1つである「単元まるごと活用」の授業の成果と考える。また、教職員は「単元の中で、児童は、課題を見つけていましたか」の問いに対して、80%が肯定的な回答をしていた。週に1度校内研修を確実に積み重ね、共通理解を図っているためと思われる。 <課題> 昨年度の結果と比較すると、高学年は大きく変化していないが、低学年ではマイナス16%となっている。休校期間が長く続いたことの影響が低学年に出ているのではないかと考えられる。2学期は1年生や3年生も「単元まるごと活用」の授業に取り組み、子ども達は学ぶことの楽しさを感じたり、算数が生活に役立つことを実感したりしている。子ども達がこのように感じられる授業づくりをしていく。
	【家庭学習の確立】 保護者と連携し、子どもたちの学習習慣を確立する。	音読・漢字練習・計算練習(高学年は自学ノート)を基本とし、学年に応じた家庭学習の時間を十分に確保する。 家庭学習強化週間は特に、お便り等で呼びかけを行う。また、学級懇談では、家庭学習のてびきを活用し日頃の家庭学習の取組について確認し、改善していく。 必要に応じて、個別指導も行う。	(家庭学習調査結果) 家庭学習強化週間記録カードをもとにした、家庭学習の目標(低学年20分・中学年40分・高学年60分以上)達成者数 ア 80%以上 イ 70%以上 ウ 60%以上 エ 60%未満	A…ア B…イ C…ウ D…エ	各学年の達成者の割合 1年 92% 2年 84% 3年 50% 4年 60% 5年 22% 6年 54%	C	<成果> 音読・漢字練習・計算練習(高学年は自学ノート)を基本として、学年の家庭学習時間に応じた宿題を設定した。 また、学級懇談では、家庭学習の様子を確認し、家庭学習のてびきを活用し日頃の家庭学習の取組について話を行った。 <課題> 学年が上がるにつれて、目標時間を達成できている児童が少なく、学習時間の個人差もあるため、学級全体で日頃の家庭学習の仕方をもう一度、確認する必要がある。調査も一度しか行えなかったため、後期は回数を増やして調査を行い、お便り等で呼びかけを行う。
健康で心豊かな人間性の育成	【道徳教育の充実】 自分を見つめ相手の立場を考え、仲良く助け合う児童を育成する。 (道徳の授業＝道徳の授業では、振り返りを書いて、ノートに貼っている。)	身近にある道徳的問題に対して、自分事として捉え、問題を解決していくことができる力を育てる。そのためにも道徳の時間において、授業や自分を見つめ直す場となる振り返りを大切にする。	(児童アンケート) 「困っている人がいたら、進んで助けようとしている。」 ア そう思う イ どちらかと言えばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ そう思わない (職員アンケート) 「道徳の授業では、振り返りを書いて、ノートに貼っている。」 ア 9割以上行っている イ 9割未満	児童・職員アンケートで A…児ア+イが90%以上かつ職アが100% B…児ア+イが80%以上かつ職ア90%以上 C…児ア+イが70%以上かつ職アが80%以上 D…それ以下	児童アンケートア+イ 90.1% 職員アンケートア+イ 100%	A	<成果> 児童アンケートで、肯定的な意見が9割以上であり、「困っている人がいたら、助けようとしている」姿が見られる。これは、縦割り班を中心とした学校生活で、高学年が低学年の世話をしたり、困っている子を助けたりすることが自然な形で行われているからと思われる。 道徳の時間では、全学年が毎時間ふり返りをノートまたはワークシートに書き、自らの生き方について見つめ直すことで道徳性を養うことにつながっていると考える。 (課題・改善点) 今年は、昨年に比べ肯定的な意見がやや減っている。新型コロナウイルス感染症で友達との関わりが難しくなってきた影響もあるが、どんな状況でも相手の立場を考え、助け合う気持ちを大切にすることが望ましいか児童に考えさせていく必要がある。
	【規範意識を高める】 社会的なルールやきまりを守る意識を高め、いじめや暴力行為のない学校をつくる。	毎月、児童会を中心に、学校全体の様子や行事を考慮して生活目標を設定する。生活目標の達成を目指した具体的な取り組みを行うことで、社会的なルールやきまりに対する意識を高める。 また、全職員が全校児童の担任であるという意識を持ち、児童の様子を観察することで、いじめの兆候の早期発見を目指す。さらに、いじめほくめつ集会などとおして、いじめや暴力行為がない学校づくりを目指す。	(達成目標) (保護者アンケート) 「学校は、いじめや暴力行為のない学校づくりに努めていると思いますか。」 ア そう思う イ どちらかといえばそう思う ウ あまり思わない エ 思わない (児童アンケート) 「児童会生活目標が守れましたか。」 ア できた イどちらかといえばできた ウ あまりできなかった エ できなかった	児童アンケート・保護者アンケートともに A…ア+イが95%以上 B…ア+イが85%以上 C…ア+イが65%以上 D…それ以下	保護者アンケートア+イ 85.1% 児童アンケートア+イ 96.2%	B	<成果> 児童アンケートでは、96.2%の児童が肯定的な回答をした。毎月「生活を良くするためのアンケート」を行い、そこで、「いじわるをされたことがあるか」について調査し、何か書かれていた場合は、迅速に聞き取りを行い、対応してきたことが成果として考えられる。また、毎月の児童理解の会では、アンケート結果だけでなく、日々の様子から気づいたことについて共有し、いじめや不登校の未然防止に取り組むことができていた。 <課題> 児童アンケートと保護者アンケートで結果に差があり、保護者アンケートでは、肯定的な割合が低くなった。毎月のアンケートには書かないが嫌だったこと、小さいけれどいじめにつながりかねない雰囲気について敏感になり、生活委員会企画で「いじめ撲滅集会」を行うなどとして、児童がより安心して生活することができる雰囲気づくりに進めていきたい。
特別支援教育の充実	【特別支援教育の充実】 個に応じた配慮に加え、ユニバーサルデザインを意識した、誰にとっても支援となる授業の工夫を図る。	児童理解の会を定期的に開催し、配慮が必要な児童の実態と支援の在り方についての共通理解を図る。 視覚的に分かりやすい教材や掲示物の作成をする。また、授業においては、重要用語をオレンジカードに書くなど、組織的な取組の継続を図っていく。	(教職員アンケート) シンプルで視覚的に分かりやすい掲示物ができたか。 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった	教職員アンケート A…ア+イが90%以上 B…ア+イが80%以上 C…ア+イが65%以上 D…それ以下	教職員アンケートア+イ 100%	A	<成果> 教職員アンケートでは、100%の職員が肯定的な回答であった。職員全体で、シンプルで視覚的にわかりやすい掲示物の作成を共通の意識として実行することができた。 <課題> 掲示物の内容、掲示物のデザイン、貼り方に各教室での小さな違いが見られた。効果的な掲示物を職員全体で共有したり、細部まで共通して環境整備をしていく必要が感じられる。

保健・安全管理の充実	【自己健康管理能力の向上】 めあてを持って、自らよりよい生活習慣を実践しようとする態度を育成する。	生活習慣の乱れは、子どもの学習意欲や体力、気力に影響を及ぼす。そのため、子どもたちに「早寝早起き朝ごはん」をはじめとした規則正しい生活習慣の確立を目指して学期毎に「バランスアップ週間」を設けて、保護者とともに自分の生活習慣を振り返る。学校全体のめあてに従い、各家庭で保護者と「就寝時刻」「起床時刻」「メディア時間」のめあてを決めて、達成度をチェックしてよりよい生活習慣の実践を目指す。	(バランスアップカードの結果) 早起きのめあてが守られたか。(保護者とめあてを相談) ア 70%以上 イ 60%以上 ウ 50%以上 エ 50%未満	バランスアップカードで A…ア B…イ C…ウ D…エ	(バランスアップカード6月の結果) 起床時刻のめあて達成度 ア：64人 (81.0%)	A	(成果) バランスアップカードに基づいた起床時刻調査では、保護者と相談して決めた起床時刻の目標達成率は81%であった。7割の児童は自分の目標が達成できていた。実際は、6時30分までに起きる児童が76%、7時までに起きる児童は24%でほぼ良好といえる。平均起床時刻は6時17分であった。 (課題・改善点) 目標達成率の最も低い学年は1年で72%であった。起床時刻が遅い児童は固定化している。個別に保護者に家庭での様子を聞くとともに、早起きすることが睡眠時間の確保に結びつくことを児童も含めて働きかけていく。継続した取り組みは効果に結びついているので、さらに「早寝早起き朝ごはん」の大切さを学級で発達段階に応じた指導を行っていく。
学校と家庭地域の連携	【家庭・地域との連携協力体制の確立】 家庭や地域と学校との繋がりを大切に、家庭と地域の教育力を生かした学校づくりを行う。	学年懇談会で学年ごとの、「家庭生活」の約束(重点目標)を決める。 学校だよりや学級だより等を通じて、取組の啓発を図る。 また、取り組み強化週間を設け、その結果を児童や保護者に知らせ、意識の継続を図っていく。	(児童アンケート) 保護者とともに決めた「家庭生活」の約束(重点目標)を達成することができたか。 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった (保護者アンケート) 「家庭生活」の約束(重点目標)の達成の度合いはどうか。 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった	児童アンケート・保護者アンケートともに A…ア+イが80%以上 B…ア+イが70%以上 C…ア+イが60%以上 D…それ以下	児童アンケートア+イ 87.0% 保護者アンケートア+イ 65.4%	C	<成果> 保護者アンケートから、「子どもたちが以前より意識して行動できるようになった」や「『約束だよ』と声掛けするだけで、守ってくれるようになった」などの意見が寄せられている。少しずつだが、生活力の向上が見られる。 <課題> 成果がみられる家庭がある一方で、継続して取り組むことが困難であることや、やらされ感があるなどの意見もある。学級だよりや学校だより等で定期的にお知らせすることができなかったことも課題として残った。連携して取り組んでいくことが必要なので、まずは家庭における保護者への働きかけをしっかりと行う。そのために、後期は必ず、定期的に「家庭生活の約束」について振り返る機会を設け、学校だよりで結果を知らせ、啓発していく。
環境整備	【学習環境の整備・校内環境美化】 各教室等の整理整頓を行い、スムーズに授業が始められるよう努める。	安全点検時を利用して、各教室の備品のチェックや整理整頓を行っていく。 長期休業中に職員作業として、特別教室等の清掃や備品の整理を行う。	(職員アンケート) 全職員で教室等の点検や備品の整理整頓を行い、校内の美化を進めることができたか。 (校外と体育館・1F・2F・3Fの4か所に於いて) ア：3か所以上 イ：2か所 ウ：1か所 エ：どこも不十分	A…ア B…イ C…ウ D…エ	(職員アンケートア+イ 100%)	B	(成果) アンケート結果から全職員が、教室の整理整頓を心掛けていることがうかがえる。また、普段の清掃活動等の様子から職員だけでなく児童も教室環境の維持に努めているといえる。また、教室を互いに点検し合うことができた。 (課題) 長期休業中に特別教室等の整理整頓を行うことができなかったため、教室によっては物が雑然と置いてあるような印象を受ける箇所がある。年度末までに特別教室等の整理整頓を行う予定である。
業務改善	【業務改善】 月当たりの時間外勤務時間を、60時間以内にする。	・毎月、第3水曜日を定時退庁の日とする。また、毎月1回各自定時退庁日を設ける。 ・週初めに業務に関する週の目安を立て、予定退庁時刻を設定し、週案に記載することで、職員が時間管理の意識を持つようになる。今年度の最終退庁時刻は、午後7:30とする。 ・業務の平準化を推進する。管理職は、特定の職員に偏らないよう留意して分担させる。 ・県内一斉リフレッシュウィークは、8月11日～14日とし、併せてその期間は学校閉庁日とする。 ・PTAの会合等で多忙化改善の取組に対する理解を求める啓発を行う。	(勤務時間調査) ア：月当りの時間外勤務時間が45時間以内の職員が30%、45～60時間の職員が70% イ：月当りの時間外勤務時間が45時間以内の職員が20%、45～60時間の職員が60%、60～80時間の職員が20% ウ：月当りの時間外勤務時間が45時間以内の職員が20%、45～60時間の職員が50%、60～80時間の職員が30% エ：月当たりの時間外勤務時間が80時間を超える職員が1人以上いる。若しくは、ウの目安を超える。	A…ア B…イ C…ウ D…エ	4～9月の時間外勤務 45h以内 のべ42名 70% 45～60h のべ14名 23% 60～80h のべ4名 7% (のべ合計 60名中)	C	(成果) 県教委提示目標をクリアすることは必須として設定。春先の臨時休業が影響して、4～5月の時間外勤務時間は減少した。勤務の平準化は、加配の職員配置があり、取り組みやすい状況となっている。 (課題・改善点) 8月は過密な改修工事日程により、管理職の時間外が激増し、校内目標としていた60h以内を守ることができなかった。また、リフレッシュウィークの実施ができなかったため、C判定とした。。今年度は、新型コロナウイルス感染症対策や改修工事の影響により、昨年度と単純には比較できない。

評価： A 達成 B おおむね達成 C・D 改善が必要